

大学教育と青年期発達

事例集

東北大学高度教養教育・学生支援機構

高等教育開発部門 入試開発室

鈴木 敏 明

入学期の事例

事例 1：神輿に乗ってやって来た 1 年生

「良ちゃん、もうすぐ夏休みでしょ？ こっちにはいつ帰ってくるの？ 予定決まったら教えて寄越しなさいね」

いつもならうれしいはずの故郷の母親からの電話を受けながら、なぜか良子さんの気持ちは深～く、深～く沈んでいくのです。

良子さんは理系学部 1 年生。希望に胸を膨らませ、故郷の町から大学のある地方都市にやってきたのは、つい 4 ヶ月ほど前のことでした。小学校以来、学業成績は常にトップで、生徒会長も務める優等生を通してきた良子さんに、父親は、自らが果たせなかった研究者になるという夢を託すようになっていました。父親は良子さんに、専門に関する本をよく買ってきてくれました。良子さんは小学校の頃からそうした本に親しみ、その分野に対する興味を育んできました。そしていつの頃からか、大学に進んでその分野を勉強し、ゆくゆくは研究者になりたいというのが、良子さんの「夢」となっていったのです。

良子さんの出身高校は、いわゆる進学校ではありません。良子さんが難関名門大学であるこの大学に進学するということは、学校にとって数十年ぶりの「快挙」でした。担任や進路指導の先生方にとって良子さんは、久々に現れた希望の星でした。

良子さんは、学業成績は全般に優秀でしたが、数学と物理学はあまり得意ではなく、理系でやっていける自信はありませんでした。しかし高校の先生からは、今の学部の推薦入試にトライしてみるよう強く勧められました。そして、面接試験や小論文試験の練習をして、志望理由や将来の夢について繰り返し語ったり書いたりしているうちに、良子さんは自分でも今の学部での勉学を熱望しているように思えてきたのです。

良子さんが今の学部に出願したいと告げた時、父親はとてもうれしそうでした。父親が喜ぶ様子を見て、良子さんも何だかとてもうれしくなって、このまま進むことが自分の本当の進路なのだと思えてきたのです。

大学から合格通知が届いた時、周囲の喜び様は大変なものでした。その熱気に押されるようにして良子さんはこの大学に入学し、アパートでの慣れない一人暮らしが始まったのです。

授業が始まると良子さんは勉強に追われるようになります。大学の授業はレベルが高く進み方も速いので、高校時代のように丁寧にノートを作ったりテキストを丹念に復習して完全に理解しようとする、時間がいくらあっても足りません。良子さんは寝る時間も削

って勉強に取り組みましたが、数学や物理学の授業はどんどん難しくなり、6 月頃にはついていけなくなりました。教室では、自分だけが取り残されているような感じがして、いたたまれません。しだいに授業に出ていけなくなっていました。

何とかして追いつかなければと思うのですが、だんだんとアパートの部屋から出る気力もなくなってきました。実家から電話がくれば、心配をかけまいと、「元気にしているよ。何とかやれているよ」と嘘を言うしかありません。ますます焦りが募ります。

最近、良子さんの頭の中では、「どうしてこんなことになってしまったのだろう?」、「どうすればいいんだろう?」という 2 つの問いが堂々巡りを繰り返すだけなのです。

検討の観点

1. 原因論：どうして、このような状況に立ち至ったのだろうか？
2. クライエントの望み：この学生は、これからどうしたいのだろうか？ どうなりたいのだろうか？
3. 利用可能な資源：そのためには、どんな援助資源があるだろうか？ ヒト、モノ、カネ、アイデアは？
4. 関与の方向性、方法、覚悟：相談を受けたあなたは、どのように対処しますか？

注記

この事例は、鈴木敏明（2011）『第 5 日 学生を理解する』（東北大学高等教育開発推進センター『PDブックレット すてきな大学教員をめざすあなたに』, p.49-62）を基に一部改変したものである。

事例 2：四面楚歌を生きる「2 年生」

留年 2 年目を迎えた剣士郎君は、目の前がパッと朱に染まったような強烈な感覚に見舞われました。「刺してやれ！」という声が聞こえたような気がします。怒りで体が震えるのが分かります。

研究室のミーティングデスクを挟んで剣士郎君と中年の教授が向かい合って座っています。デスクの上には剣士郎君が 3 日前に提出した実験レポートが置かれています。教授が非常に丁寧に何か説明しているようです。

「このレポートのことなのですが、君と同じ実験班の人達が提出したものと比べると、測定値が全く違っているようなのだけど、それはなぜですか？」

「わかりません」

「先週、皆と一緒に実験したんでしょう？」

「はい、やりました。でも、班の人が誰も僕に結果を教えてくれなかったんです」

「班の中で何か人間関係のトラブルでもあったんですか？」

「皆、僕のことを馬鹿にしているんです。だから、そんな無礼な奴らには、僕からも話しかけたりしないようにしてるんです。測定値は適当に書き込んでおいたものです」

「そういうことだったんですか… しかし、この実験は大変重要な現象を扱っているので、自分で直接経験しておかないと将来きっと困りますよ。君は今日この後何か予定が入っていますか？ 時間があるようだったら、私と一緒に実験をやり直してみませんか？」

教授のこの言葉を聞いた瞬間、剣士郎君の頭の中で「ブチッ」という音とともに、何かが切れました。「皆僕のことを馬鹿にしているんだ！」という想念が剣士郎君の頭の中で膨れ上がりました。

「大きなお世話です。他人の将来のことを心配するよりも、先生こそ自分の人生を見直した方がいいんじゃないですかね。こんな所には二度と来ません！ じゃあ、どうも！」

捨て台詞を吐き、ドアを叩き付けるように閉めて、剣士郎君は研究室を出て行ってしまいました。帰りがけに実験室を覗くと、教授が大事にしている高額の実験装置が目に入りました。剣士郎君はツカツカとその装置に歩み寄るや、手近にあった配線を引きちぎり、制御コンソールに、空手で鍛えた強烈な蹴りを入れました。

1. 原因論：どうして、このような状況に立ち至ったのだろうか？

2. クライエントの望み：この学生は、これからどうしたいのだろう？ どうなりたいのだろう？
3. 利用可能な資源：そのためには、どんな援助資源があるだろう？ ヒト、モノ、カネ、アイデアは？
4. 関与の方向性、方法、覚悟：相談を受けたあなたは、どのように対処しますか？

注記

この事例は、鈴木敏明（2011）『第 5 日 学生を理解する』（東北大学高等教育開発推進センター『PDブックレット すてきな大学教員をめざすあなたに』, p.49-62）を基に一部改変したものである。

事例3：博愛主義者？の輝美（てるみ）さん

輝美さんは文系学部の3年生です。前期の授業も6月末に、極度の疲労感と焦燥感を訴えて、学生相談所に来談しました。

輝美さんは長身で、背筋をピンと伸ばして着座し、いつも両手を膝の上にきちんと重ねて、相談員と正面から視線を合わせ、何でもハキハキとした語り口で話すところが印象的でした。話の内容も、的確に言葉を選んで明快に表現するところは、高い知性と自制力を感じさせるものでした。

この4月から研究室のゼミが始まり、しばらく経過した頃から主訴の疲労感と焦燥感に悩まされるようになったそうです。配属されたゼミは輝美さんの第1志望でしたし、ゼミで取り上げられるテーマも、大変興味を惹かれる内容だそうです。担当教授に対しても、その学識と人柄に魅力を感じているとのことでした。また、ゼミの仲間関係で特段の不協和を感じているということもないとのことでした。

「何か他に、疲れたり、気を使ったり、緊張するようなことでもあるのでしょうか？」という相談員からの問いかけに対しては、家族関係、経済関係、サークルやアルバイト関係とも、思い当たることがないし、元来身体は丈夫な方で、ここ数年は病気らしい病気をしたこともなく、従って、継続治療を要する持病といったものもない、と輝美さんは言うのです。

しかし、相談員は、輝美さんの「ただ、やはりゼミの前後に強い疲労感や焦燥感を感じ、それが尾を引く感じがずっと続いているような気がするんです」という言葉に本能的？な引っ掛かりを感じました。それを代表するのは、例えば以下のような会話です。

相談員：「ゼミの授業のために、何かとても疲れる準備や勉強をしているのでしょうか？」

輝美さん：「ええ。自分のレポート担当の番が当たっている時は、もちろん一生懸命準備をするので疲れるのですが、私は、ゼミの他の人がレポート番の時も、その人のために一生懸命準備のお手伝いをしているんです。そして、その成果が授業で認められて、レポーターの人が先生から褒められるのを見ていると、自分自身の中に喜びが湧き上がって来るんです。だから、毎回レポート番の人のお手伝いをしないではいられなくなって、そのせいで疲れちゃうんじゃないかと思うんです。私は、人からバカと思われる方が安心するんです。その代わり、お手伝いしてあげた他の人が認められて、先生に褒められるところを見ると、自分のことのように嬉しくなって、充実感を感じるん

です。」

相談員：「……………」

検討の観点

1. 原因論：どうして、このような状況に立ち至ったのだろうか？
2. クライエントの望み：この学生は、これからどうしたいのだろうか？ どうなりた
いのだろうか？
3. 利用可能な資源：そのためには、どんな援助資源があるだろうか？ ヒト、モノ、
カネ、アイデアは？
4. 関与の方向性、方法、覚悟：相談を受けたあなたは、どのように対処しますか？

事例4：隠者の夕暮れ？

今日も、もう夕方です。豆腐屋さんのラッパが聞こえてきます。表通りでは、帰宅を急ぐ車の通行も繁くなったようです。窓の外では、紅葉した木々が木枯らしに吹かれて、カサカサ、ザワザワという葉擦れの音を伝えてきます。

ここは、カーテンを閉め切った薄暗いアパートの一室です。部屋の隅にはベッド、その脇にはパソコンが載ったデスクと専門書を並べた小振りの書架が配置されています。その横には傾きかけたファンシーケースが並んでいます。玄関ドア脇のキッチンでは、シンクに、洗っていない食器類や食品のパッケージの残骸の類が堆く積み重なり、何やら怪しげな臭気を発散していますし、チョロチョロと動き回る黒い昆虫の姿も観察されます。部屋の床面は、中央の半畳ほどの空所と玄関を繋ぐ幅30cmほどの通路？を除き、衣類や新聞・雑誌類、丸めたティッシュ等々が層を成しています。

やっ！ ベッドの上で何かが動いています。やがてむっくりと起き上がったのは、この部屋の住人、寺先武蔵（てらさき むさし）君です。頭髪はぼさぼさ、無精髭は伸び放題、目脂だらけの目をこすり、ひとつ深いため息を漏らしました。もう少し暗くなったら、闇にまぎれて食料の調達に出るつもりなのです。

武蔵君は理系学部の3年生。卒業研究や就職活動を控えて忙しいはずのこの時期、まったく学校に出て行かなくなり、アパートに閉じ籠る状態となってから、かれこれ7ヶ月が経過してしまいました。

4月、研究室の最初の顔合わせの会を失念していて欠席してしまったので、その会で決めた研究室内の役割分担やゼミの当番スケジュール等から外れてしまいました。翌週、研究室に行き、ドアの隙間から中を窺うと、皆、楽しそうにせっせと作業やら実験やら輪読会やらをしている様子が見えました。武蔵君はすっかり気後れしてしまい、それ以降は、日に日に研究室の敷居が高くなる一方だったのです。

トントン、トントン。「寺先さん、いらっしゃいますか？」 玄関ドアをノックする音がします。ガチャガチャと鍵を開けようとする気配もします。大家さんと他に数人の声がします。武蔵君は素早くベッドの下に潜り込み、息を殺してじっと身を固くして備えます。

「うわっ、何だ、この臭いは。凄い部屋だな。寺先君、いないの？ 照明が消えているから、外出中かな？」

「先生、誰かいますよ！ ベッドの下を見て下さい！」

「ややっ！ 何してるの？ 君は …… 寺先武蔵君だよな …… 」

「どうも、初めまして」

「初めましてって、武蔵君 …… ずっと、こんな状態だったんですか？ …………… 」

検討の観点

1. 原因論：どうして、このような状況に立ち至ったのだろうか？
2. クライエントの望み：この学生は、これからどうしたいのだろうか？ どうなりたいのだろうか？
3. 利用可能な資源：そのためには、どんな援助資源があるだろうか？ ヒト、モノ、カネ、アイデアは？
4. 関与の方向性、方法、覚悟：相談を受けたあなたは、どのように対処しますか？

事例5：力行第一の執念を貫く4年生

秋晴れの或る日、キャンパスの日溜まりのベンチに、来春に卒業を控えた知可子さんの姿があります。知可子さんが指先で扇の形に拡げているのは、この日までに企業や官庁から届いた5枚の採用内定通知書です。普通なら、このご時世に5件もの内定通知を得ることは大変な慶事のはずなのですが、知可子さんの表情は冴えません。この半年ほどは特に気持ちの落ち込みがひどく、ここ1ヶ月くらい不眠がちです。朝起きるのが辛くて、怠さがとれません。

今朝、家を出がけに、また母親からいつもの嫌みを言われました。

「いったい誰があんたの学費を出してると思ってるの？ そのところの自覚が足りないんじゃないの？ 夜だっていつまでも起きてるようだし、電気代が無駄よ！ 言うことを聞けないなら、この家から出て行ってちょうだい！」

しかし、母親は時にはとても優しく接してくるときもあるのです。

「知可ちゃん、お隣からおいしいお饅頭いただいたから、一緒に食べない？ お母さんはあなたのことがとても心配なの。ずっと一緒に仲良く暮らしていこうね。来年の就職はどうするの？ 遠くに行くくらいだったら、あなたが行きたいって言っていた大学院に進んで、この家から通えばいいじゃないの？ お金はちゃんと出してあげるわよ」

知可子さんは、幼い頃お婆ちゃん子でした。その祖母が、或る時両親に対して、「何故この子は親の顔色ばかり窺うの？ お前達はどんな育て方をしているだい？」と言っていたのを記憶しています。

大学入学以来、親との葛藤の解決と大学院で勉強するという希望の折り合いをどのようにつけるかが、知可子さんの最重要課題でした。その反動ということでしょうか、知可子さんは全力で勉学に精進しました。能力的に恵まれていたこともあって、成績は優秀。人柄も誠実でしっかりしているので、就職試験は「連戦連勝」という結果でした。

知可子さんには、実はもう1つの懸案があります。3年生の頃からいろいろと相談に乗ってもらってきた大学院学生の健一郎君のことです。勉学や研究のことだけでなく、プライベートな相談についても、健一郎君はまるで優しい父親のように知可子さんの話をじっくりと聴いてくれました。大学院に進学したい理由の1つには、健一郎君と一緒に過ごしたいという思いもあったのです。

知可子さんの溜め息が聞こえてきます。就職すべきか、はたまた大学院に進むべきか。

結論はまだ見えてきません。もうすぐ木枯の季節がやって来ます。

1. 原因論：どうして、このような状況に立ち至ったのだろうか？
2. クライエントの望み：この学生は、これからどうしたいのだろうか？ どうなりたいのだろうか？
3. 利用可能な資源：そのためには、どんな援助資源があるだろうか？ ヒト、モノ、カネ、アイデアは？
4. 関与の方向性、方法、覚悟：相談を受けたあなたは、どのように対処しますか？

注記

この事例は、鈴木敏明（2011）『第 5 日 学生を理解する』（東北大学高等教育開発推進センター『PDブックレット すてきな大学教員をめざすあなたに』，p.49-62）を基に一部改変したものである。

卒業期の事例（卒業直後）

事例6：寄る辺（よるべ）ない行路（こうろ）の心細さ

「あ～あ、またやってしまった」 渋谷ヒカリエ1Fのカフェに、うつむき加減で眼前のコーヒーカップをぼんやり眺めている小太郎君の姿があります。何だか元気がありません。

その日、朝から、小太郎君は、今春就職した会社の新入社員研修会に出席していました。人事担当執行役員の挨拶に始まり、人事課の研修担当者による会社の概要説明、数人ずつに分かれてのグループワーク、と研修プログラムは段取りよく進行し、昼食休憩を挟んで午後のメニューが始まったときに、事件は起こりました。

研修初日ということでの緊張・疲労と、お腹が満ち足りたこととが相俟って、堪え難い眠気が小太郎君を襲いました。「居眠りしちゃいかんぞ」と小太郎君は自分に言い聞かせ、極力開眼維持に努めたのですが、講師の声が段々遠くに行ってしまうような気がします。意識がスーッと薄れて行くのが分かります。

小太郎君は、突然の大きな振動を感じ、瞬間的に我に返りました。「すわ、地震か？」 周りからどっと笑い声が上がりました。傍らでは研修担当の主任が怖い顔をして小太郎君を睨みつけています。「君、ちょっとこちらへ来て下さい」 主任は小太郎君を研修会場の隣の小部屋に連れて行きました。

「研修初日から居眠りとは大した度胸ですね。態度悪いんじゃないですか！ そんな調子で、これからやって行けるつもりなんですか？」

「……………」

「面接では偉そうなことを言っていたくせに、都合が悪くなると黙りかい？ 何とか言ってみろよ！」

「……………」

「大人の社会では、こんな時は、まず謝るものなんだよ。済みませんでしたと言えないのか？」

「…………… じゃあ、言わしてもらおうよ。そもそもこんな会社に来たくはなかったし、まして、あんたみたいな教養も無い、言葉遣いも下品な奴から偉そうに説教されるつもりも更々ないんだよ。今、この場で辞めてやるよ。ああ、辞めてやる。」

それから3ヶ月後、出身大学のキャンパス前のバス停に小太郎君の姿がありました。研究生としてもう一度学生になりたいので、受け入れ先を探しているとのことでした。かつての指導教員からは、受け入れを固く拒否されたので、どこか他を探さなければならず、さりとて当てもないので困惑しているとのことでした。

検討の観点

1. 原因論：どうして、このような状況に立ち至ったのだろうか？
2. クライエントの望み：彼は、これからどうしたいのだろうか？ どうなりたいたいのだろうか？
3. 利用可能な資源：そのためには、どんな援助資源があるだろうか？ ヒト、モノ、カネ、アイデアは？
4. 関与の方向性、方法、覚悟：相談を受けたあなたは、どのように対処しますか？

事例 7：ある大学院学生の憂うつ

「君には、やる気というものがないのか？ 何のためにこの研究室に居るの？ もっと真面目にやれよ！」

教授から厳しい叱責の言葉を受けて、真之介君には返す言葉が見当たりません。ただただ俯いて嵐が頭上を通り過ぎるのを待つしかありません。

真之介君は理系研究科・博士前期課程 2 年生です。将来は研究職に就きたいと考え、地方の中規模大学を卒業後、旧帝大であるこの大学院に進学してきました。学部時代の専門は純粋科学系だったのですが、今の研究室は応用科学系で、産学連携の研究を活発に行っています。専門が変わることは今の研究室に来る前から覚悟はしていたのですが、あまりに違いすぎたため真之介君は当惑してしまいました。

研究室の指導教授は、以前は民間企業の研究部門にいた人で、最先端の研究成果を精力的に発表しています。研究室の学生に対しては、毎週、研究の進捗状況や成果の報告を求め、不足点があれば翌週までの対応を求めるという、厳しい指導法を採用しています。

研究室の学生たちは、教授から、「教えて下さい式の質問は認めない！」と言いつけられています。しかし真之介君は、何がどう分からないのかが分からない状態ですし、教授の話を聴いていても意味がよく理解できません。論文を読んでも内容が頭に入りません。最近では本当に自分が何をやりたいのか分からなくなってしまいました。

こんな状況を教授に相談するなんて恐ろしくてできません。だからといって、研究室の他の学生たちは自分とは異質な感じがして、率直に話せそうにありません。先月体調を崩してから、研究室に出て行けなくなってしまいました。親に、学生相談所で相談してみようかと言ったところ、「そんな所に行くと、精神病ということで退学させられるぞ」と脅かされました。この町での生活も合わない感じだし、これ以上ここで頑張れそうな気がしません。真之介君の意識の水面には「八方塞がり」という言葉が浮きつ沈みつしています。

1. 原因論：どうして、このような状況に立ち至ったのだろうか？
2. クライエントの望み：この学生は、これからどうしたいのだろうか？ どうなりた
いのだろうか？
3. 利用可能な資源：そのためには、どんな援助資源があるだろうか？ ヒト、モノ、
カネ、アイデアは？

4. 関与の方向性，方法，覚悟：相談を受けたあなたは，どのように対処しますか？

注記

この事例は，鈴木敏明（2011）『第 5 日 学生を理解する』（東北大学高等教育開発推進センター『PDブックレット すてきな大学教員をめざすあなたに』，p.49-62）を基に一部改変したものである。

事例 8：あなたの優しさが怖くなってきた

猛暑の夏もようやく過ぎ、さわやかな秋風が吹き渡るキャンパスの中、重たそうなバッグを肩に掛け、足早に研究棟脇の通路に行く恵子さんの姿があります。

恵子さんは博士前期課程2年生です。修士論文作成も中盤から取りまとめの段階にさしかかり、最近、補充の文献調査やデータの再分析などを行いつつ、本編の文章推敲に追われる忙しい日々を送っています。今日も、これから指導教員である閻雲先生の指導を受けるために、その研究室に向かっているところなのですが、心做しか眉間の縦皺が深く見えるのは何故でしょう？

恵子さんは、将来は大学教員となることを志望し、地元の地方大学を卒業後、旧・帝大であるこの大学の研究科に進学してきました。恵子さんは、以前から人見知りが強く、家の外に1人でいると理由のわからない不安が込み上げてきて、誰か頼れる人が傍にいてくれないと本当に倒れてしまいそうな気がするものがしばしばありました。見知らぬ街でのこの1年半ほどの慣れない一人暮らしは、そうした傾向を一層強めたようでした。

そんな状態にあった恵子さんを、閻雲先生は親身になって指導・支援してくれました。分からないことがあれば、それこそ「手取り足取り」、何でも懇切丁寧に教えてくれました。慣れない土地で不安いっぱいの一入暮らしを強いられていた恵子さんにとって、研究室で指導を受けたり、資料調べやパソコンで作業している時が、唯一ホッと安心できる時間となっていたのでした。何時しか恵子さんは午前中から夕刻にかけてのほぼ終日、閻雲研究室に居続けるようになります。一緒にコーヒーを飲んだりお弁当を食べたり、先生が授業や会議の時は「お留守番」役も担うようになりました。

しかし最近になって恵子さんは、「このようなベッタリ状態のままで、果たして良いものだろうか？」という疑問を持つようになって来ました。「年齢相応の自立した行動をするべきだ」という内なる批判の声が聞こえて来ます。そもそも何で閻雲先生がこんなに親切にしてくれるのかという点について、不審の念が頭をもたげてきます。「先生、どうして私にこんなに優しくしてくれるんですか？」と質問してみたくなるのですが、そんなことをするのは、これまでの先生の善意を無にする大変無礼な行為であるようにも思われるのです。恵子さんの心の中で、そうした葛藤が渦巻く今日この頃なのです。

修士論文は胸突き八丁の一番重要な段階にさしかかっています、そして今日もこれから優しい先生のところに行かなければなりません。恵子さんの眉間の縦皺は、ますますその

深みを増すようです。

検討の観点

1. 原因論：どうして、このような状況に立ち至ったのだろうか？
2. クライエントの望み：この学生は、これからどうしたいのだろうか？ どうなりたいのだろうか？
3. 利用可能な資源：そのためには、どんな援助資源があるだろうか？ ヒト、モノ、カネ、アイデアは？
4. 関与の方向性、方法、覚悟：相談を受けたあなたは、どのように対処しますか？

事例9： 歯を食いしばる日々。ならぬものはならぬです！

「上下とも、奥歯がかなり摩滅してますね。これは、だいぶ激しく歯ぎしりをした結果ですね。痛みを感じるようになったのはいつ頃からですか？ 何か生活上の変化とかストレスに心当たりはありませんか？」

歯科医師からの問いかけに、治療台の上に横たわった八重野はるかさんは、診療室の窓の外に広がる光のページェントをぼんやりと眺めていました。そして、ふと、あることに思い当たったのでした。

はるかさんは理系・博士後期課程2年生です。将来は研究職に就き、科学の歴史を変えるようなインパクトのある研究を成し遂げたいという強い意志で、意欲的に日々精進を積んでいます。しかし、2年生になって、教授から研究室のとりまとめ役をまかされてからは急に忙しさが増したような感じがしていました。しかしそれは彼女にとっては苦痛ではなく、むしろ喜びであり、やりがかったのです。

彼女の手帳の予定表から、今年12月のある日の行動記録を再録してみましょう。

- 9時 研究室に到着。合同研究室と実験室の掃除・清掃。実験機器や試薬の在庫状況等について点検等を実施
- 9時30分 その日の研究室の予定について、教授との打ち合わせ。学生個々の研究の進捗状況について報告し、企業との共同研究について教授から指示を受ける
- 10時 学部学生や大学院学生が研究室に揃ったところで、今日一日の活動についてのミーティング
- 10時30分 学部学生と留学生による文献輪読会に陪席し、適宜指導を実施
- 12時 研究室のメンバーを誘って大学生協で昼食
- 13時30分 共同研究を進めている企業の担当者と、具体的なスケジュールの調整についての打ち合わせ
- 15時30分 研究室メンバーを緊急召集し、企業との共同研究のスケジュール変更について連絡し、実験の分担等を調整
- 16時 留学生からの生活上の困難についての緊急相談に対応
- 17時 研究室のメンバーを誘って大学生協で夕食
- 17時30分 研究室忘年会の予約をお店に入れる

- 18 時 研究室メンバーの個別の研究相談に対応
- 20 時 自分の研究の実験とデータ解析
- 23 時 30 分 帰宅。洗濯，入浴，ちょっと晩酌。学部時代の友人からの，「来年 3 月に結婚します」という便りを見る
- 24 時 学会発表用の原稿を推敲
- 1 時 30 分 就寝

今夜はクリスマス・イブ。後期課程 2 年生になってから今日までのほぼ 9 ヶ月間，はるかさんの一日は，ほぼこのようなスケジュールで埋まっていました。土日・祝日を返上して研究室に出ることもしばしばでした。

はるかさんは教員からも，研究室メンバーからも頼りにされ，慕われる存在です。はるかさん自身も，そうした周囲の評価を嬉しく思い，そうした期待にもっと応えていきたいと思っています。でも，自分の奥歯達のプロテストも気になるのです…

検討の観点

1. 原因論：どうして，このような状況に立ち至ったのだろうか？
2. クライエントの望み：この学生は，これからどうしたいのだろうか？ どうなりた
いのだろうか？
3. 利用可能な資源：そのためには，どんな援助資源があるだろうか？ ヒト，モノ，
カネ，アイデアは？
4. 関与の方向性，方法，覚悟：相談を受けたあなたは，どのように対処しますか？